



心學道孔話 篇下

廿四

9
3895
24止



門 口 9
號 3895
卷 24

早稲田 大學 圖書館
昭和 27.6.16 受
藏 書

心學道之活八篇卷の十

前も中と通り大川の水も粟山より
ありと松の露や積れり積りて大船と

流る大川とふたりもす。粟や積れり

あるえいは懸位のききむん

数万石積りてさる末ぶらり

めと一粒は種あぞ有る

大船ふたとふつんど米もえい一里うが二粒

とありとつりて一合とあり一升とあり一斗と

とあり一石とあり五石米石もあつて

心學道話 卷下 八編 十一

町家の身代でも一度お母様一様お替金
 銀もやたら。先祖の切やさかしくとるると一
 二銭の値にお溜りもお替も本一も悪くも
 お替もわり。まゝ一斗り法よりがたきつそ。
 大善おも大悪おもあつところ先年一由舎
 おも下らまきまして替くとりまきと道輔先生
 とやけの及二先生のゆき息おと道活の
 おもお人でお替りまきと具お方が大坂
 お居まきと時場の後者の社家の仲おも
 大分社仲が大勢集つておれ活して居

とや。後者の社仲があつとやかすおの
 おるを学おとりおのあつとんおとお角
 お人の金でもりのあける二面斗り考つて居り
 おもお漸くおどもおまおさんるのの思おぬ
 やうおありまきと。只一ツおおひがお替り
 おふや一と先生おおりあさうはおん
 おせぬが。おを金お百両おりおあおごり
 お守とや一ととおおらおおおおおあ
 おまお社家一おも私の為おすおやおい
 おの通りおどもを愛おあんお者お

多く。もんおと食同炊どもをそ水中人まゐ
りどあしふだしとよおざりまはすあしむりな
半しと百あおめもりわどやがどふり不
のきんがわあうりござりまはす

おむとけも長やお金がおりしうら

糺とあぐんとすくみあは

とらふおもござりまはすとりあをそと小居人
が一回ふ威かすと及南先生いりつどもそんま
時あふ居候りしとあ度る人そ水をきくと。あつと
目とあのみ今のまゝい何れ半どやイヤチ振く

の半しであざりまはすとりあを及南先生いりあ
そ水の丸く喉どやイヤ喉どやござりまはす
イヤ喉どや大うそとやく喉お遠のあ
あやうこがある。そ水の今其人金がああうら
そふありみのとや。今うらざやうみふとりのあを
其の子とやして美船のものに入らうどもであら
お主人の親とや合点がやうぬ着百両あると
まづ是の不特の用意ふ仕舞てあのことあぞ
今あは外ふ百両あらうらあぞわどしーたい
とありふ。そんならうらまこと百両あるとおもまづ

のうらさもよるとありふりたる八百は地獄
 とありらんおは。佛法で地獄極楽といふ
 りはが向ふふちやんとありらんうへて有は
 此ぞ人間の善とあり。惡をたす教法作
 トや。け心学の社中へ入は縁友のといふ
 人のいりと純州の生れをよく修りのかま
 人。或時徳本上人が衆へよふまゝ時満衆の
 衆つそごを何ぞ尋て見るとありてきく
 考て見まゝとが。是ごとくゆつて見ると
 おりふりもあらうとが。ふと思ひおしとあり

和尙様あの人間がよのよとすや極楽なり
 惡いものすや地獄へ落ちるといふがとわく
 くらゐのりが多いゆへ地獄へ切りが多い勝
 そゆと如來さるが不便お知りてはよく
 地獄へ落ちる衆生をすくひおと物てあきら
 とや申すや。そゆと申すや。和尙のうへも
 さやう入はゆかど私も老朽ぞんじとあり
 申す愛ふ一ツ不審なことがあはれり申す
 元史は考はそゆにだれな事と一と
 をおとやとぞんじます。なせとなればそは

かりふそしうらうらうたすけても修ぜん跡あとふら出で
 来くら人間かんげん先せんづりくあから悪あくいそはし
 地獄ぢごくへ落おちくさるあび籍しやくいの人ひとる浪なみりのまへと
 史しより阿あ弥い陀ださむれカかで地ぢごを刑けいして
 去さまらうら面めん割わりちうりの入いらぬ譯やくあまご
 うゆのちからでも地獄ぢごくいどちも刑けいさぬゆりの
 心こころでさ度どりまうらうとままうら徳とく本ほんと人ひと心こころ
 してあまやありうらうらごそんたう事こと今いまと
 突つとまねがたいあまも大おほきふ衆しゆの
 本ほんがあまのりうらうら經きやう冊そくととらう

送まわり地獄ぢごくや餓う鬼きのあまのり
 十じゅう方ほう法ぽう界がいごまあまとあま
 と書かて録ろく古こ多たのへら水みづとを私しあまおし
 んせまうらと地ぢご極ごく楽らくとりあま
 子こ供どもが金かね葉はあまでもすうらあまご
 極ごくつらうらま事ことでもあまとらあま
 居いる変へんしと向むかふあまらうら待まち受うけ居いる
 心こころ地獄ぢごくのまんな凡かん夫ぶが我われもあまらう
 のドや史し中人ちゆうじん地ぢごあま送さう地ぢごとりあま送さう
 極ごく楽らくとりあま極ごく楽らくの生なままつら

危くありぬ。我われ又また汝なんぢと云ふこと不危ふきなり。汝なんぢ白乐天はくらくてん我われの當時とうじ大夫たいふの官くわんもあて人ひとも多おほく石達いしだつくこと汝なんぢがことも何なにやういふことのあいでありません。禪ぜん作さくを汝なんぢがこと先まづい汝なんぢの徳とくのたうこと道みちも知しれぬ。又また智ちもたうことそれと大夫たいふの友とものがらと一箇いつくの政事せいじと書かの仲なかつも自みづかずする。且かつ大智たいちは家来けらいと石いしつうこと第一だいいつの志しもあることときい。汝なんぢがこと家来けらいうら一箇いつく中なかつもすて不特ふとくの雅みやびなとらう家来けらいあるまじいものなり。まじき。家けの形かたちもまじき。枝えだの上うへもあはれぬ。汝なんぢがことせうふまは子ことらうこと我われの徳とくとすことあり。あつとも一箇いつくの禍わざはひあり。他たふ善ぜんをおうがまじきと申まをたらう。さうがふ白乐天はくらくてん大たい小せう威い心しんと如ごと河かもあり。まじきぬ。汝なんぢがこと進しんめはうこと何なに卒そつ佛ぶつのの大きおほきとぬぬ。一いつりされまじきと申まをたらう。禪ぜん作さく諸しよ要やう莫な作さく衆しゆ善ぜん奉行ぶつぎやうと答こたへまはと白乐天はくらくてんうめくことと笑わらつ。まはと歳さいの臺たい子こも知しる。汝なんぢがこと志しのたうこと禪ぜん作さくがこと歳さいの臺たい子こも知しる。申まをたらう。易やす一いつ八十はちじゅうの翁おきなも行ゆふこと難がたし。と申まをたらう。通とほり善ぜん申まをたらう。と申まをたらう。悪あくとまじき人ひとす。汝なんぢがこと

せうふまは子ことらうこと我われの徳とくとすことあり。あつとも一箇いつくの禍わざはひあり。他たふ善ぜんをおうがまじきと申まをたらう。さうがふ白乐天はくらくてん大たい小せう威い心しんと如ごと河かもあり。まじきぬ。汝なんぢがこと進しんめはうこと何なに卒そつ佛ぶつのの大きおほきとぬぬ。一いつりされまじきと申まをたらう。禪ぜん作さく諸しよ要やう莫な作さく衆しゆ善ぜん奉行ぶつぎやうと答こたへまはと白乐天はくらくてんうめくことと笑わらつ。まはと歳さいの臺たい子こも知しる。汝なんぢがこと志しのたうこと禪ぜん作さくがこと歳さいの臺たい子こも知しる。申まをたらう。易やす一いつ八十はちじゅうの翁おきなも行ゆふこと難がたし。と申まをたらう。通とほり善ぜん申まをたらう。と申まをたらう。悪あくとまじき人ひとす。汝なんぢがこと

悪とりの何とさしと悪とりの何とさしを。けふ
 人の體とわりの何とさしとりの何とさしを。けふ
 先が根とありこそは是より何事も得
 勝もがて世界のさるるげとするやうふ
 なるうら悪とりの何とさしとけしや人と
 別とさし心も平等一投さりので心
 んまが人もさしもつごとのたりの。り
 一辨のりのゆへ一辨の通りやとゆけを
 それでさしと。これまより何とさし
 と人と我と別とさし。丁度けし

まるさしとみたるさしと平等一投のあり
 是と我の方と押上りと。さしの方の
 けうたりの方が我で地紙の方が世界
 かのめの方とわりの何とさしと。地
 の方がり。全辨我身がすあらし世界。さ
 が心我。さしと入我ま入りの何とさし
 我とりの何とさしと世界の何とさしと
 若みの渥良恭儉謙とと渥良のさし
 やうふむらさしとのさしとさしとさしと
 いかさしとさしとさしとさしとさしと

心學遺論

卷下

八編

十

うやうやしく儉とあるんやで儉とあるんや
 りる事。それゆへに礼を徳の徳に世界の人が
 今ふあつても有がさがる銘といふ仲こそふ
 田うぬ女房がすまう一言りやといふ顔ふぬ
 とおしとてさうとたりといふ世界が別におぬ
 己が浪ふ色とおどる。世界をととりこむ
 のふぬ。己が方を樂ふすと世界とらし
 むののどや。すべて世界の妨ふたうを愛と
 のふぬ。付のどや。すまうも我といふのあ
 世界の物ふぬ。あつてさうといふ名がつくふ儉

入事といふと大遣ふせえらるが。何もむらう
 いふのどや。あつてさうといふ名や。すまう。あ
 今日く深切お親と大事ふすまう。あ入事と
 りの名がつき。御主人様と大切おあつて
 忠といふ名がつく。さういふ女房の夫を大切お
 してあつて。もま葉がう。さういふと仕
 るあつて。自らといふ名がつく。さういふ。一人
 おやまらして自身とわらう。あつて。あつて。あ
 といふ。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あ
 る。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あ

吾も我も一つもの激塵もたうい申へ世界の
 物も我もたうい人我の隔がたうい申へ
 申へ私のやうなまきれでもあまの時のわりの
 らういふとあまきれが修くぬ人すういはれぬ。我
 がう芳とらふりのがあまきれ。世の申へ何れも
 家ありのわりの通りふりたうい。何でもありのわりの
 とありのふりたうい申へあひひこんで居る。心も
 と修りして本心を知るときあひ。成りど我あを
 りくとらふりのわりの。修くぬ人すういはれぬ。我
 申へ我子我女房我家来い申へ備我男乃

半・でも一つものありのわりの通りあや修ぬぬ
 維でも長生一とらふりたうい申へあひひこんで居る。心も
 居るといふわりの月日ふりたうい申へあひひこんで居る。心も
 年とともぬがたうい申へあひひこんで居る。心も
 鏡で己が顔を見くぬ人も笑うい。うぬ
 びきそ死ぬるいあひひこんで居る。心も
 あひひこんで居る。心も
 あもりげのらふりたうい申へあひひこんで居る。心も
 命ふりたうい申へあひひこんで居る。心も
 かうりたうい申へあひひこんで居る。心も

あまのついでに 葬守ふ阿のやうかを食むるおなら
 あやたらぬそ水ゆへ 露月新おあつひをそんそ
 傍のかりぬときついついむらり

かりりてごあもさう 死命を
 いらふ命と惜ぐりても 新おあつひも死ぬ時
 死ぬそ水ゆへ一休がまこと

面敷のうらみかうりき年ゆれ
 無病息災死るはあつひ
 あつひへ通りあや行ぬ
 生きても死ぬるもあつひあつひ

あつちむらり

いやでもあつちでもごらう申あやなぬあん
 或人があつちを死るたら 娘死であつちあ
 あつちと平生の縁がひでぬごらうとあつち
 思ふとあつちあつちまうとあ友達ごらう
 いやとごらうあつち八云傍へあつちあつち
 望この通りあつちことりあつち八云傍の
 悔あつちあつちあつちあつちあつちあつち
 死がのぞきあつちあつちあつちあつちあつち
 やれとあつちあつちあつちあつちあつちあつち

新ふとわりのつて。妻ふあまづへ 師を侍々
 中うふをた。まじりくと流氷をゆく。あは
 氣がけぬ株のむとらうとかけつて通つと
 とんて居る。あはくらのまが鬼の通るま
 一やとありめて網を張て待て居る。中うあ
 めた。皆天の極と別々の世たいを持ゆん
 とも天の極のまうせふすまうのが
 とりあ。全く本心とゆふをたを知ぬゆん
 今日の境界がひとり狂言本心を知つと。
 今日たよりがえと通り軍の通りおめす

見ふもあうともありあとも思ふぬ
 ともひとりてふをた通りおと居る。別
 思慮分別とまじりあもあがぬ中一
 ざざりま守後でちうくハア権じやと知
 あやあといやと猫と知。外をあまも今
 花のあーこんな右は。とらうのた
 石あやけふまごげねがあぬと。一くあも
 のいでもまじりひとりてふあうねる。ま
 まも思慮分別とまじりあもあぐ
 中うあたらう居る。教は向人を

